神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

Commentaries on the Zhongguo xiaoshuo shilüe (Lu-xun's a brief history of Chinese fiction) (ＸＩ)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1994-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中嶋, 長文, Nakajima, Osafumi メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/2262

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

中國小說史略考證 第十一續

中島長文

7

（承前）

『郡齋讀書附志』拾遺云、夷堅志四十八卷。右洪文敏公邁記異志怪之書也。其名蓋取列子所謂大禹行而見之、伯益知而名之、夷堅聞而志之。說者謂夷堅乃古之博物者云。

『直齋書錄解題』卷二二云、夷堅志甲至癸二百卷、支甲至支癸一百卷、三甲至三癸一百卷、四甲四乙二十卷、大凡四百二十卷。翰林學士鄱陽洪邁景盧撰。稗官小說、昔人固有爲之者矣。游戲筆端、資助談柄、猶賢乎已可也、未有卷帙如此其多者、不亦謬用其心也哉。且天壤間反常反物之事、惟其罕也、是以謂之怪。苟其多至於不勝載、則不得爲異矣。世傳徐鉉喜言怪、賓客之不能自通與失意而見斥絶者、皆詭言以求合。今邁亦然。晚歲急於成書、妄人多取廣記中舊事、改竄首尾、別爲名字以投之、至有數卷者、亦不復刪潤、徑以入錄。雖敍事猥釀、屬辭鄙俚、不恤也。

『師弟答問集』第一六—一八頁云、〔增田問云〕126頁　洪邁夷堅志ノトコロ　奇特之事、本緣希有見珍、而作者自序、『乃甚以繁夥自憙、耄期急於成書、或以五十日作十卷、妄人因稍易旧說以投之、至有盈數卷者、亦不暇刪潤、徑以

入錄』（陳振孫直齋書錄解題十一云）　右ノ作者自序ハ『乃……錄』マデデスカ？ or『乃……自意』マデデ、後ハ陳某ノ言デスカ？　〔魯迅答云〕耆期云々以下、皆ナ陳振孫ノ言ヲ述ベタノデス。奇特ノ一ハモトヨリ希有ヲ以テ珍トナサレ、而シテ作者ノ自序ニヨレバ甚タソノ沢山デアルヲ以ッテウヌボレ（陳氏ノ書錄ー ニヨレバ）耆期ニイタルト…

〔增田問云〕〃　惟所作小序三十一篇、什九「各出新意、不相複重」、宋史本伝ノ言デスカ？　〔魯迅答云〕宋人ノ隨筆ニヨル（趙令時『侯鯖錄』）これは同じく趙姓による思い違いで、『史略』原文の「趙與皆『賓退錄』」が正しい。增田氏が魯迅の手紙をそのまま承けて、『各出新意、不相複重』。この語は宋の趙令時の『侯鯖錄』に見る」と注しているのは誤りである。

阮元『揅經室外集』卷三「夷堅甲乙丙丁志各二十卷提要」云、宋洪邁撰。影宋鈔本。案夷堅志十集、每集二十卷。支志十集、每集十卷。三志十集、每集十卷。四志甲乙二集二十卷、共四百二十卷。小說家唯太平廣記爲卷五百、然卷帙雖繁、乃搜輯衆書所成者。其出于一人之手、而卷帙遂有廣記十之七八者、唯有此書、亦可謂好事之尤者矣。邁每集各自爲之序。唯四乙未成、不及序。計序三十一篇、篇各出新意。趙與時嘗撮各序大指、載于賓退錄。此本甲志序已佚、餘三序存、與賓退錄所擧相合。每卷之下注明若干事、每事亦必注明某人所說、以著其非妄。書中神怪荒誕之談居其大半。然而遺文軼事可資考鏡者、亦往往雜出于其間。四庫全書所收者乃支志五十卷、與此不相涉。此本卷首有元人沈天祐序、稱建學所存舊刻闔本殘闕、承本路府判張紹先之命、以浙本補全者。邁與兄适、遵皆皓之子、名位著述皆相埒、世所稱鄱陽三洪是也。邁亦有弟二人、一景裴名邃、一景何不知其名、皆見于此書。

現存するテキストに關する『史略』の記述は、資料的に不十分だった時代に書かれたものだからやむを得ない不備があり、いまでは少しく訂正しなければならない。現行のテキストで最も完備したものは、一九二七年に涵芬樓が編印

した『新校輯補夷堅志』をもとにさらに增補した中華書局本（一九八一）である。甲より丁までの八十卷、支甲より支癸までの七十卷、三己・辛・壬の三十卷、補卷二十五卷、再補一卷、三補一卷、合計二百七卷で、三補は中華書局本が加えたものである。『史略』がいう八十卷は當時では十萬卷樓叢書本に見られた甲より丁までの八十卷であり、五十卷は『四庫提要』にいう支志のそれであろう。摘抄本五十卷とは、具體的にどのような版本か不明であるが、いまの筆記小說大觀本五十卷と同系統のテキストであろう。また二十卷本とは乾隆戊戌周氏刊本をいうと考えられる。しかしこれら所謂摘抄本は、卷數こそ違うものの、收錄する內容は同じで、ほぼ原本の支甲から支癸までの七十卷と三己・辛・壬をカヴァーする。いくらか脫落はあるが、ごく一部を除いて、集ごと卷ごとにまとめて版刻されているので、摘抄本と言うより、甲から丁までの初編を除く再編本と言った方がよい。乾隆刊本と小說大觀本を比較すると、大觀本は乾隆刊本の甲より癸に至る十集、各上下二卷をそれぞれ五卷に分割したもので、題目の順序まで完全に一致する。大觀本は時に脫落はあるが、乾隆刊本とは誤りまで一致するから同系のテキストと考えてよい。少なくとも大觀本の祖本は、乾隆刊本を分割したものであったか、乾隆刊本が大觀本の祖本五十卷を二十卷にまとめたか、どちらかであるが、乾隆刊本が甲から癸に至る十集という體裁を採っているのに對して、大觀本ないしその祖本が五十卷として元の『夷堅志』の體裁に顧慮しない所を見ると、前者の可能性が強いように思われる。なお『魯迅藏書目錄』は涵芬樓本を著錄するが、これは一九二七年の日記にその購入を記すように、『史略』の成稿には及ばず、その後もこれによって『史略』の記述を訂した形跡はない。

8 傳奇之文、以至于『綠珠傳』最明白　一〇三―三

寫印本『大略』九末云、此種文字、流風至宋不絕、而多托史事、少敍時人。樂史之大眞傳而外、有秦醇之趙飛燕別傳

（說郛）失名之綠珠傳（同上）煬帝海山記開河記迷樓記（古今說海）梅妃傳（說郛）等、後之五篇、今每誤爲唐人作也。『史略』第十一篇後半全體に當る敍述である。又本篇10引の「小說的變遷」參照。鉛印本『大略』は『史略』に同じ。合訂再版で「『許邁傳』各一卷」を「『許邁』各史一卷」と誤る以外は各版に異文なし。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「綠珠傳」一卷出『琳琅祕室叢書』。其所據爲舊鈔本、又以別本校之。末有胡珽跋、云、「舊本無撰人名氏。案馬氏『經籍考』題「宋史官樂史撰。」宋人『續談助』亦載此傳、而刪節其半。後有西樓北齋跋云、「直史館樂史、尤精地理學、故此傳推考山水爲詳、又皆出于地志雜書者。余謂綠珠一婢子耳、能感主恩而奮不顧身、是宜刊以風世云。」咸豐三年八月、仁和胡珽識。」今再勘以『說郛』三十八所錄、亦無甚異同。疑所謂舊鈔本或別本者、卽並從『說郛』出爾。舊校稍煩、其必改「越」爲「粵」之類、尤近自擾、今悉不取。

『續談助』卷五晁載之跋云、右鈔直史館樂史所撰綠珠傳。史獨精地理學、故此傳推考山水爲詳、又皆出於地志雜書者也。二十六日西樓北齋鈔。

『郡齋讀書志』卷九云、綠珠傳一卷。右皇朝樂史撰。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、「楊太眞外傳」二卷、取自『顧氏文房小說』。署史官樂史撰、『唐人說薈』收之、誣謬甚矣。然其誤則始于陶宗儀『說郛』之題樂史爲唐人。此兩本外、又嘗見京師圖書館所藏丁氏八千卷樓舊鈔本、稱爲「善本」、然實凡本而已、殊無佳處也。『宋史』藝文志史部傳記類著錄「曾致堯『廣中台記』八十卷、又『綠珠傳』一卷」、頗似傳亦曾致堯作。又有「『楊妃外傳』一卷」、注云、「不知作者」。又有「樂史『滕王外傳』一卷、又『李白外傳』一卷、『洞仙集』一卷、『許邁傳』一卷、『楊貴妃遺事』二卷」。注云、「題岷山叟上」。書法函胡、歿不可以理析。然『續談助』一跋而外、尙有郡齋讀書志（九、傳記類）云、「『綠珠傳』一卷、右皇朝樂史撰」。又「『楊貴妃外傳』

二卷、右皇朝樂史撰。敍唐楊妃事迹、訖孝明之崩」。而『直齋書錄解題』（七、傳記類）亦云、「『楊妃外傳』一卷、直史館臨川樂史子正撰」。則『綠珠』『楊妃』二傳、皆樂史之作甚明。『楊妃傳』卷數、宋時已分合不同、今所傳者蓋晁氏所見二卷本也。但書名又小變耳。

『郡齋讀書志』卷九云、楊貴妃外傳二卷。右皇朝樂史撰。敍唐楊貴事迹、訖孝明之崩。

『直齋書錄解題』卷七云、楊妃外傳一卷。直史館臨川樂史子正撰。

『宋志』卷二史部傳記類云、野史甘露新記二卷、大和野史三卷、逸史一卷、拓跋記一卷、文場盛事一卷、楊妃外傳一卷、並不知作者。

曾致堯廣中台記八十卷、又綠珠傳一卷。

樂史唐滕王外傳一卷、又李白外傳一卷、洞冥集一卷、許邁傳一卷。楊妃貴遺事二卷、題峨山叟上。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、樂史、撫州宜黃人、自南唐入宋、爲著作佐郎、出知陵州。以獻賦召爲三館編修、遷著作郎、直史館。觀「綠珠」「太眞」二傳結銜、則皆此時作。後轉太常博士、出知舒黃商三州、再入文館、掌西京勘磨司、賜金紫。景德四年卒、年七十八。事詳『宋史』（三百六）樂黃目傳首。史多所著作、在三館時、曾獻書至四百二十餘卷、皆敍科第孝悌神仙之事。又有『太平寰宇記』二百卷、徵引羣書至百餘種、今尚存。蓋史旣博覽、復長地理、故其輯述地志、卽緣濫史採錄、轉成繁蕪。而撰傳奇如「綠珠」「太眞傳」、又不免專拾舊文、如『語林』、『世說新語』、『晉書』、『明皇雜錄』、『開天傳信記』、『長恨傳』、『酉陽雜俎』、『安祿山事迹』等、稍加排比、且常拳拳于山水也。

『宋史』卷三〇六樂黃目傳云、樂黃目字公禮、撫州宜黃人。世仕江左李氏。

父史、字子正。齊王景達鎭臨川、召掌牋奏、授秘書郎。入朝、爲平原主簿。太平興國五年、與顏明遠、劉昌言、張觀並以見任官擧進士。太宗惜科第不與、但授諸道掌書記。史得佐武成軍、既而復賜及第。上書言事、擢爲著作佐郎、知陵州。獻金明池賦、召爲三館編修。

雍熙三年、獻所著貢擧事二十卷、登科記三十卷、題解二十卷、唐登科文選五十卷、孝弟錄二十卷、續卓異記三卷。太宗嘉其勤、遷著作郎、直史館。轉太常博士、知舒州、遷水部員外郎。淳化四年春、與司封員外郎、直昭文館李蕘同使兩浙巡撫、加都官、知黃州。又獻廣孝傳五十卷、總仙記一百四十一卷。詔秘閣寫本進內。史好著述、然博而寡要、以五帝、三王、皆云仙去、論者嗤其詭誕。

咸平初、遷職方、復獻廣孝新書五十卷、上清文苑四十卷。出知商州。史前後臨民、頗以賄聞。俄以老疾爲言、聽解職、分司西京。五年、郊祀畢、奉留守司表入賀、因得召對。上見其矍鑠不衰、又知篤學、盡取所著書藏祕府、復授舊職、與黃目同在文館、人以爲榮。出掌西京磨勘司、黃目爲京西轉運。改判留司御史臺。車駕幸洛、召對、賜金紫。史久在洛、因卜居、有亭榭竹樹之勝、優游自得。未幾卒、年七十八。所撰又有太平寰宇記二百卷、總記傳百三十卷、坐知天下記四十卷、商顏雜錄、廣卓異記各二十卷、諸仙傳二十五卷、宋齊丘文傳十三卷、杏園集、李白別集、神仙宮殿窟宅記各十卷、掌上華夷圖一卷。又編己所著爲仙洞集百卷。【史略】の「西京勘磨司」は鉛印本【大略】からすでにそう作るが、全集注の指摘のように傳文にある「西京磨勘司」としなければならない。

『綠珠傳』のテキストには「稗邊小綴」が述べるように明鈔『說郛』、『琳琅祕室叢書』があり、それらを校訂した『唐宋傳奇集』がある。また『續談助』本があり、原文の前半を載せる。その删除には理由がないわけではない。「稗邊小綴」が言うように、綠珠に關するものだけではなく、事例の似たものを諸書から引用して、物語としては冗

長にすぎるからである。ところで『續談助』本の文末には、綠珠の故郷では樂史の時代（？）にも婦人の間に綠珠髻という髪型が傳わることを言う。これは後人の附加を疑えるけれども、また明鈔『說郛』とは異なる系統のテキストであった可能性も否定できない。明鈔『說郛』にも『琳琅祕室叢書』本にもその記述はない。なお、增補本『說郛』などの俗本も『綠珠傳』『楊太眞外傳』に限っては、比較的知られた話であるためか、脫誤錯誤は免かれないものの、だいたいにおいて全文を傳えており、その改竄削除等は他の作品ほどひどくはない。

『楊太眞外傳』は『顧氏文房小說』本、明鈔『說郛』本、『唐開元小說六種』本、『唐宋傳奇集』本などがある。なお明鈔『說郛』卷三十八所收は題下に「三卷全」と注するが、分卷はしておらず、内容は他の版本と違いはない。撰者を「唐樂史卽唐史官」とする。

9 所引『綠珠傳』 100＋10

『史略』の引くテキストはおそらく明鈔本『說郛』であろうと思われる。琳琅祕室叢書本とも、『唐宋傳奇集』本とも合わない。しかし涵芬樓本明鈔『說郛』とも合わない部分があるので、魯迅の見た明鈔本は涵芬樓本とは違っていたと考えるほかない。涵芬樓本は「孫秀」の上に「賊類」二字があり、「于是墮樓而死」の上に「因崇止之」四字がある。後者は琳琅祕室叢書本も同じ。そして『史略』各版の校勘でも述るが、涵芬樓本他が「晉明帝」と作るのを『史略』舊版は「宋明帝」と誤っている。さらに涵芬樓本は「七竅四肢」の上に「而」字があり、「正城之東」は「王城之東」、「仁義之性」は「仁義之行」、「唯利是視」は「唯利是務」に作る。しかし「他無所愛、綠珠不可得也」や「辜恩負義」は一致する。その部分琳琅本は「吾所愛、不可得也」、「辜恩背義」に作る。

「晉明帝」は鉛印本『大略』以來、三八年版全集までみな「宋明帝」に誤る。五七年版全集ではじめて『唐宋傳奇

集』に據ってか、「晉」に改められた。「七窮四肢」の上の「而」字、鉛印本『大略』より三八年版全集まですべて欠き、五七年版全集で補われた。「懷反復之情」の「懷」字、鉛印本『大略』より三八年版全集まで「多」字に作り、五七年版全集で改められた。「唯利是務」の「務」字また鉛印本『大略』より三八年版全集まで「視」に作り、五七年版で「務」に改めた。重較『說郛』本も「視」に作る。「辜恩背義」の「背」字、鉛印本『大略』より三八年版全集まで「負」に作り、同じく五七年版全集で改められた。五七年版全集はみな『唐宋傳奇集』に據ったらしいが、『史略』引用が欠く部分は補っていない。

『師弟答問集』第一八頁云、〔增田間云〕127頁　綠珠傳ノ引文　…趙王倫亂常、……秀自是謂倫族之、…全族ヲ殺ス？全族トハ普通、『親、我、子、孫』デスカ？ or『祖父…□…兄弟』——コンナノモ這入リマスカ？〔魯迅答云〕三族ト九族ノ分アリ、晉朝ハ大抵只三族ヲ誅ス。三族＝(1)父母伯叔—(2)自身其ノ兄弟—(3)子女。亦卽チ祖父母ノ子孫（＝父母伯叔）、父母ノ子孫（自身及ビ其ノ兄弟）、自分ノ子女、卽チ全家ナリ〔又答云〕〔常〕＝綱常　增田氏は日本語譯本『支那小說史』でこの「族」字に注して「一族を死罪にすること。父母及び伯叔・我及び兄弟・子女——卽ち三族を誅すること。九族の場合もあるが、晉では大抵ただ三族であった。」と言う。

10 其後有亳州誰人秦醇字子復、以至而結以〝團圓〟者也。　一〇四＋三

鉛印本『大略』は「（一作子履）」の「作」を「云」に作り、「冷玄」の「玄」を「元」に、「二曰『曠山記』、三曰『溫泉記』」を「二三曰『曠山記』『溫泉記』」に作り、「文辭」を「文詞」に「汝州民張正字」の「字」を闕く他は『史略』に同じ。但し「張正字」の「字」字は、鉛印本『大略』以降、五七年版全集で訂されるまで各版ずっと闕く。

「小說的變遷」第四講云、上次講過、傳奇小說、到唐亡時就絶了。至宋朝、雖然也有作傳奇的、但就大不相同。因爲

唐人大抵描寫時事、而宋人則外講古事。唐人小說少教訓、而宋則極多教訓。大概唐時講話自由些、雖寫時事、不至于得禍、而宋時則諱忌漸多、所以文人便設法回避、去講古事。加以宋時理學極盛一時、因之把小說也多理學化了、以爲小說非含有教訓、便不足道。但文藝之所以爲文藝、并不貴在教訓、若把小說變成修身教科書、還說甚麼文藝。宋人雖然還作傳奇、而我說傳奇是絶了、也就是這意思。（中略）至于創造一方面、則宋之士大夫實在并沒有甚麼貢獻。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴 全集卷十云、宋劉斧秀才作『翰府名談』二十五卷、又『撫遺』二十卷、『青瑣高議』十八卷、見『宋史』藝文志子部小說類。今惟存『青瑣高議』。有明張夢錫刊本、前後集各十卷、頗難得。近董康校刊士禮居寫本、亦二十卷、又有別集七卷、『宋志』所無。然宋人卽時有引『青瑣撫遺』者、疑卽今所謂別集。『宋志』以爲『翰府名談』之『撫遺』、蓋亦誤爾。其書雜集當代人志怪及傳奇、漫無條貫、間有議、亦殊淺率。前有孫副樞序、不稱名而稱官、甚怪。今亦莫知爲何人。此但選錄其較整飭曲折者五篇。作者三人、曰魏陵張實子京、曰譙川秦醇子復（或作子履、）曰淇上柳師尹。皆未考始末。一篇無撰人名。「宋人卽時有引『青瑣撫遺』者」待考。

『郡齋讀書志』卷一三小說類云、青瑣高議十八卷。右不題撰人。載皇朝雜事及名士所撰記傳。然其所書、辭意頗鄙淺。

『宋志』卷五子部小說家類云、劉斧『翰府名談』二十五卷、又『撫遺』二十卷、『青瑣高議』十八卷。

『四庫提要』卷一四四子部小說家類存目二云、青瑣高議前集十卷後集十卷 兩淮鹽政採進本。不著撰人名氏。晁公武讀書志及宋史藝文志皆著錄、亦皆不云誰作。趙與旹賓退錄稱爲劉斧青瑣高議、當必親見其標題。前有孫副樞序、不稱名而舉其官、他書亦無此例。其爲里巷俗書可知也。所紀皆宋時怪異事蹟、及諸雜傳記、多乖雅訓。每條下各爲七字標目、如張乖崖明斷分財、回處士磨鏡題詩之類、尤近於傳奇。閒有稱議曰者、寥寥數言、亦多陳腐。讀書志稱其詞意鄙淺、良非輕詆。公武所錄作十八卷、宋史藝文志亦同。此本乃多兩卷、或坊賈傳刻又有所竄入歟。蔡絛鐵圍山叢談稱所載孫愐射

寵被追見韓琦爲紫府眞人事、其說不謬、然稱爲靑瑣小說、或又其別名也。孫愐事魏公別錄魏公家傳皆載之。周煇淸波雜志又考其同異、謂當以家傳爲正、其所引王老志別一說、卽蔡絛語也。韓琦名德、何必死作閻羅王。乃足取重斧作小說侈談神怪可矣。士大夫以爲實事、而記於家傳別錄、好事者又校正其異同、相率說夢、不亦傎乎。

『靑瑣高議』のテキストは、「唐宋傳奇集序例」にいう、明張夢錫刊本及び舊鈔本、董康刊士禮居本のうち前二者はすでに見られない。魯迅は一九二一年から二三年にかけて『靑瑣高議』を抄寫している。「序例」にいう張夢錫刊本ではないかと思われるが、『手蹟目錄』にも著錄がなく失われたらしい。したがってどういうテキストなのか確めようがない。董康刊本はのちに古典文學出版社が排印し（一九五八）、さらにそれに補遺を加えた上海古籍出版社版（一九八三・宋元筆記叢書）が出たので、最も見やすい。他に文學古籍社版『唐宋傳奇集』（一九五六）の校記によれば、明鈔本、四庫館舊鈔本（提要にいうもの）、惠定宇藏舊鈔本（士禮居本の祖本）があるが、いずれも見ることは難しい。

『唐宋傳奇集』「稗邊小綴」全集卷十云、「趙飛燕別傳」出前集卷七、亦見于原本『說郛』三十二、今參校錄之。胡應麟（『筆叢』二十九）云、「戊辰之歲、余偶過燕中書肆、得殘刻十數紙、題「趙飛燕別集」。閱之、乃知卽『說郛』中陶氏刪本。其文頗類東京、而末載梁武答昭儀化寵事。蓋六朝人作、而宋秦醇子復補綴以傳者也。第端臨『通考』漁仲『通志』並無此目。而文非宋所能。其閒敍才數事、多俊語、出伶玄右、而淳質古健弗如。惜全帖不可見也。」又特賞其「蘭湯灩灩」等三語、以爲「百世之下讀之、猶勃然興。」然今所見本皆作別傳、不作集。『說郛』本亦無刪節、但較『高議』少五十餘字、則或寫生所遺耳。『高議』中錄秦醇作特多、此篇及「譚意歌傳」外、尙有「驪山記」及「温泉記」其文蕪雜、亦間有俊語。倘精心作之、如此篇者、尙亦能爲。元瑞雖精鑒、能作『四部正譌』、而時傷嗜奇、愛其

動魄、使勃然興、則輒冀其爲眞古書以增聲價。猶今人聞伶玄『飛燕外傳』及『漢雜事祕辛』爲僞書、亦尙有怫然不悅者。

『師弟答問集』第二〇頁云、〔增田問云〕129頁　趙飛燕別傳ノ文中ニ「蘭湯灩灩、昭儀坐其中、若三尺寒泉浸明玉」〔三尺寒泉〕蘭湯？〔明玉〕昭儀？〔魯迅答云〕yes, 比譬デス。

『少室山房筆叢』卷二九流緖論下云、楊用修謂唐小說不如漢、而擧伶玄趙燕飛傳中一二語爲證。戊辰之歲、余偶過燕中書肆、得殘刻十數紙、題趙飛燕別集。閱之乃知卽說郛中陶氏刪本。其文頗類東京、而末載梁武答昭儀化黿事。蓋六朝人作、而宋秦醇子復補綴以傳者也。第端臨通考、漁仲通志、並無此目、而文非宋所能。其間敍才數事、多俊語、出伶玄右、而淳質古健弗如。惜全帙不可見也。

別集稱昭儀方浴、帝私覘。侍者報昭儀、昭儀急趨燭後避。帝瞥見之、心愈眩惑。他日昭儀浴、帝默賜侍者、特令不言。帝自屛幃覘之。蘭湯灩灩、昭儀坐其中、若三尺寒泉浸明玉。帝意飛揚。語近侍曰、自古人主無二后、有則立昭儀爲后矣。右敍昭儀浴事入畫、蘭湯灩灩三語、百世下讀之、猶勃然興、矧親炙耶。玄傳、膚體光發占燒燭七字佳。

「驪山記」「溫泉記」ともに『靑瑣高議』前集卷六による。この卷は楊貴妃に關する故事が集められている。「驪山記」の題下に「張俞遊驪山作記」とあるが、本文には主人公が記を書いたことは出ない。その下に作者名もないので一見無名氏かと疑われるが、次の「溫泉記」に「西蜀張俞遇太眞」とあり、その下に「亳州秦醇子履撰」とあって、主人公も話題も共通するために秦醇の撰と認めたのであろう。「驪山記」は『類說』卷四六に引く『靑瑣高議』にかなり刪除された形であるが、「溫泉記」の方は刊本『靑瑣高議』卷六に引くのが唯一のテキストである。

『唐宋傳奇集』稗邊小綴全集卷十云、譚意歌傳出別集卷二、本無「傳」字、今加。有注云、「記英奴才華秀色」、今削。

意歌、文中作意哥、未知孰是。唐有譚意哥、蓋薛濤李冶之流、辛文房『唐才子傳』曾擧其名、然無事迹。秦醇此傳、亦不似別有所本、殆竊取「鶯鶯傳」「霍小玉傳」等爲前半、而以團員結之爾。『唐才子傳』巻二の李季蘭の項には女流が列擧してあり、その中に崔鶯鶯などと共に譚意歌の名がある。しかし元稹の傳奇「鶯鶯傳」の女主人公の名と並列されるところを見れば、はなはだ怪しく唐代の實在も疑われるべきである。『類説』巻四六引用の文では題を「譚意哥記」とする。もとより略引で足本は刊本『青瑣高議』以外には見られない。

11 不知何人作者有『大業拾遺記』二巻、以至情致亦時有綽約可觀覽者 一〇四—四

鉛印本『大略』は『史略』と變らない。『南部煙花錄』の「花」字を初版より六版まで「化」に誤る。「因請放官奴」の「請」字を二版のみ「論」に誤る。

『唐宋傳奇集』「稗邊小綴」全集巻十云、「隋遺錄」上下巻、據原本『説郛』七十八錄出、以『百川學海』校之。前題唐顔師古撰。末有無名氏跋、謂會昌中、僧志徹得于瓦棺寺閣南雙閣之荀筆中。題『南部煙花錄』爲顔公遺稿。取隋書校之、多隱文。後乃重編爲「大業拾遺記」。原本缺落、凡十七八、悉從而補之矣云云。是此書本名「南部煙花錄」、既重編、乃稱「大業拾遺記。」今又作「隋遺錄」、跋所未言、殆復由後來傳刻者所改歟。書在宋元時頗已流行、『郡齋讀書志』及『通考』並著「南部煙花錄」。『通志』著「大業拾遺錄」。『宋史』藝文志史部傳記類亦有顔師古「大業拾遺」一巻、子部小説類又有顔師古「隋遺錄」一巻、蓋同書而異名、所據凡兩本也。本文與跋、詞意荒率、似一手所爲。而託之師古、其術與葛洪之『西京雜記』、謂鈔自劉歆之『漢書』遺稿者正等。然才識遠遜、故罅漏殊多、不待吹求、已知其僞。清『四庫全書總目』(一四三)云、「王得臣『麈史』稱其「極惡可疑」。姚寬『西溪叢語』亦曰、「「南部煙花錄」文極俚俗。又載陳後主詩云、夕陽如有意、偏傍小窗明。此乃唐人方域詩、六朝語不如此。『唐藝文志』所載「煙花錄」、記幸廣陵事、此本已亡、故流俗僞作此書云云。」然則此亦僞本矣。今觀下巻記幸月觀時與蕭后夜話、有「儂家

事一切已託楊素了」之語、是時素死久矣。師古豈疏謬至此乎。其中所載煬帝諸作、及虞世南贈袁寶兒作、明代輯六朝詩者、往往採掇、皆不考之過也。」

『郡齋讀書志』卷六史部雜史類云、南部煙花錄一卷。右唐顏師古撰。載隋煬帝時宮中祕事。僧志徹得之瓦官閣筍筆中。一名大業拾遺記。

『文獻通考』經籍考卷二二史部雜史類云、南部煙花錄一卷。晁氏曰、唐顏師古撰。載隋煬帝時宮中祕事。僧志徹得之於官閣筍筆中。一名大業拾遺記。

『通志』藝文略卷三史部雜史類云、大業拾遺錄一卷　記煬帝幸江都。

『宋志』卷二子部傳記類云、顏師古大業拾遺一卷。

又卷五子部小說家類云、顏師古隋遺錄一卷。

『百川學海』據宋咸淳本覆刻本庚集「隋遺錄」跋云、右大業拾遺記者、上元縣南朝故都、梁建瓦棺寺閣、閣南隅有雙閤、閉之忘記歲月。會昌中、詔拆浮圖、因開之、得荀筆千餘頭、中藏書一帙、雖皆隨手靡潰、而文字可紀者、乃隋書遺藁也。中有生白藤紙數幅、題爲南部煙花錄。僧志徹得之。及焚釋氏群經、僧人惜其香軸、爭取紙尾、拆去視軸、皆有魯郡文忠顏公名、題云手寫、是錄卽前之荀筆、可不擧而知也。志徹得錄前事、及取隋書校之、多隱文、特有符會、而事頗簡脫。豈不以國初將相爭以王道輔政、顏公不欲華靡前跡、因而削乎。今堯風已還、德車斯駕、獨惜斯文湮沒不得爲辭人才子談柄、故編云大業拾遺記。本文缺落凡十七八、悉從而補之矣。

『四庫提要』卷一四三子部小說家類存目二云、大業拾遺記二卷。一名南部煙花錄。舊本題唐顏師古撰。末有跋語稱、會昌中沙門志徹得之瓦棺寺閣、乃隋書遺稿云云。王得臣麈史稱、其極惡可疑。姚寬西溪叢語亦曰、南部煙花錄文極俚俗、又

載陳後主詩云、夕陽如有意、偏傍小窗明。此乃唐人方域詩、六朝語不如此。唐藝文志所載煙花錄記事廣陵事、此本已亡、故流俗爲作此書云云。然則此亦僞本矣。今觀下卷記幸月觀時、與蕭后夜話、有儂家事一切已託楊素了之語、是時素死久矣。師古豈疏謬至此乎。其中所載煬帝諸作及虞世南贈袁寶兒作、明代輯六朝詩者往往採掇、皆不攷之過也。

姚寬『西溪叢語』の說は蔡居厚の『詩史』（『詩話總龜』前集二引）にあることを、そして『舊唐志』には『煙花錄』が著錄されないことを、程毅中『古小說簡目』（一九八一・中華書局）は指摘する。

周中孚『鄭堂讀書記』卷六三小說類云、隋遺錄二卷。百川學海本。舊題唐顏師古撰。師古仕履見正史類。四庫全書存目作大業拾遺記。讀書志雜史類作南部煙花錄。通考雜同。通志雜作大業拾遺錄。宋志傳記類止作大業拾遺。而史類于小說類又別載隋遺錄、蓋又別據一本類也。末有跋語、不著撰人。」略敍文。今觀是書、載煬帝幸江都時宮中秘事。文極俚俗、又誤以唐人詩爲陳後主詩。又于大業季年作煬帝已託楊素之語、其爲僞託師古所撰無疑。宋人如王彥輔姚令威諸家、本不信以爲眞也。特明人輯總集者、皆不知其爲僞書、將書中所載諸詩、一概甄錄耳。說郛歷代小史均收入之。唯陶氏作大業拾遺記云。周中孚が述べるように、明鈔『說郛』と『百川學海』の他に『歷代小史』に收める一卷本がある。それに魯迅の校訂した『唐宋傳奇集』本がある。宋代の『類說』に略引するが、そこでは杜寶の『大業雜記』との混淆が見られる。

『師弟答問集』第二〇頁云、〔增田問云〕130頁 大業拾遺記ノトコロ 宇文化及將謀亂、因請放官奴分直上下、詔許之、「是有焚草之變」〔分直上下〕？〔上下〕？〔是〕於是？〔焚草之變〕？ 〔魯迅答云〕官奴ヲ解放シテ内外（＝上下）ノ番（＝直）ニ分配シ。（ツマリ奴隷ヲ門衛トシタノ） 宇文化及謀亂ノ計画成就ノ時、城外ニ兵ヲ置キ城内ニモ兵卒數萬人集メ火ヲ擧ゲテ城外ノ人々ニ知ラセタ。（入城サセル爲メ）煬帝其聲ヲ聞イテ何ノ事ダト問ク。司馬虔通（宇文化及ノ黨羽）僞リテ曰ク「草坊（牧草ヲ儲蓄スル庫）失火、外人（宮外ノ人＝官、兵、民）救火、故喧囂

耳。」帝之ヲ信ジテ準備ナシ、遂ニ殺サレタ。（『隋書』中ノ宇文化及傳ニ見ユ。）増田氏がこの部分に「宇文化及の謀亂したとき、城外に兵を置き、城内にも兵卒數萬人集め、火を擧げて城外の者に會圖した。煬帝は其の聲を聞いて何事かと問ふた、すると司馬虔通（宇文化及の黨）が僞つて「草坊（牧草を儲蓄する倉庫）が失火し、外人（宮城外の人）が救火のために大騒ぎをしてゐるのである。」と答へた。帝は之を信じて何の準備もなしに遂に殺された。『隋書』の宇文化及傳に見る」と注するのは、ほとんどこの返事をそのまま承けたものであることが分る。

12 所引『大業拾遺記』 一〇五十五

「稗邊小綴」の述べるように明鈔『說郛』を底本に景宋本『百川學海』を參校したとしか言いようがないが、不可解な點が一、二ある。一つは「帝大悅」の「帝」が『說郛』、景宋本『百川學海』ともに「上」であり、『唐宋傳奇集』もそれに從うこと、二つは「時虞世南草征遼指揮德音敕于帝側」の「時」下に各本「詔」字があること、である。後者は單純な脫誤かもしれない。前者は文章の前後からその統一をはかったかとも考えられるが、『史略』の通例ではそういうことをしない。これもかれの見た明鈔本『說郛』がそう作っていた可能性がある。他に「詩詞未終」、『百川學海』本は「詩詞」二字がない。また「麗華辭以拋擲歲久」を『百川學海』本は「麗華白後主辭以拋擲歲久」と三字多い。いずれも『百川學海』本に從わなかった所である。それに對して「腰肢依拒」の「依拒」二字は明鈔『說郛』では、「裊娜」に作る。なお「帝令寶兒持之」の「令」字は、明鈔『說郛』、景宋本『百川學海』ともに「命」字であり、鉛印本『大略』も、『史略』初版、合訂二版も「命」に作るが、三版以後すべて「令」に作る。これは舊に復して「命」に作るべきである。但し同じ『百川學海』でも用說郛刊版重編本は「令」に作る。また「爾時麗華最恨、」「…紫毫筆、」「…青驄駒、」の下の各句讀點は五七年版全集が『唐宋傳奇集』に據って附けたもので、三八年版全集までの各版にはないものである。舊に復しても差支えないと考える。「乃徐起終一曲」の「終」字、二版誤って脫し、

三版でまた補わる。

『師弟答問集』第二〇頁云、〔増田問云〕〃同引文　…長安貢御車女袁寶兒、…〔御車女〕トシテ as, or デアッタトコロノ who　〔魯迅答云〕御車女トナルベキモノダト思ッテ貢シタ袁寶兒。實ハ臣下ノ謙遜ノ言デ、アソバレルハヅデ貢シタモノ

〔増田問云〕…昔伝飛燕可掌上舞、朕常謂儒生飾于文字、〔常〕平常 or 嘗？〔魯迅答云〕〔常〕＝カツテ

〔増田問云〕…學畫鴉黃半未成〔鴉黃〕額黃？〔圖あるも略す〕〔魯迅答云〕yes.

〔増田問云〕131頁　…帝昏湎滋深、往往爲妖祟所惑、……呉公宅鶏臺、…〔呉公宅〕地名？〔鶏臺〕地名？〔魯迅不答〕

〔増田問云〕…倚臨春閣試東郭綈紫毫筆書小研紅綃作答江令「璧月」句、云々〔小〕形小ナル？〔魯迅答云〕yes.

〔増田又問云〕江令トハ江ト云フトコロノ長官ノ意デスカ？〔魯迅注長官云〕yes. 江ハ江總、太鼓持文臣ダ

〔増田又問云〕…韓擒虎躍青驄駒擁万甲直來衝人、〔万甲〕万兵？〔魯迅答云〕yes.〔増田又問云〕…後主問帝、「蕭妃何如此人？」〔蕭妃〕煬帝ノ妃デスカ？〔魯迅答云〕yes.

13 又有『開河記』一卷、以至清褚人獲又增改以爲『隋唐演義』　105十1

鉛印本『大略』は「明羅貫中…」以下を「復演爲平話（『隋煬帝逸游召譴』、見『醒世恆言』二十四）、播之民間、而羅貫中則撰集爲『隋唐演義』。」に作る。羅貫中の『隋唐志傳』はいま見られず、羅貫中撰、鐫楊升庵批評と題する『隋唐兩朝志傳』が傳わるのみであるが、魯迅は二本ともに見たのではなく、褚人穫の『隋唐演義』の序文から類推したということは、本書第十四篇の記述に明らかである。また新版全集が「自識運盡。」で句點を附けるが、これは鉛印

本『大略』から六版までが「;」であって、訂正版ではじめて「。」となった。『開河記』の記述の最後を「;」にするならば、ここも當然「;」に復すべきである。また「褚人穫」も三八年版全集以前のように「褚人穫」でなければならない。

『唐宋傳奇集』「稗邊小綴」全集卷十云、「煬帝開河記」從原本『說郛』卷四十四錄出。『宋史』藝文志史部地理類著錄一卷、注云不知作者。清『四庫目』以爲「詞尤鄙俚、皆近于委巷之傳奇、同出依託、不足道。」按唐李匡乂『資暇集』(下)云、「俗怖嬰兒曰〝麻胡來。〟不知其源者、以爲多髯之神而驗刺者、非也。隋將軍麻祜、性酷虐。煬帝令開汴河、威稜旣盛、至稚童望風而畏、互相恐嚇曰〝麻祜來。〟稚童語不正、轉祜爲胡。」末有自注云、「麻祜廟在睢陽。鄜方節度李丕卽其後。丕爲重建碑。」然則叔謀虐殘、且有其實、此篇所記、固亦得之口耳之傳、非盡臆造矣。惜李丕所立碑文、今未能見、否則當亦有足資參證者。至冢中諸異、乃頗似本『西京雜記』所叙廣陵王劉去疾發冢事、附會曼衍作之。

「煬帝迷樓記」錄自原本『說郛』三十二。明焦竑作『國史經籍志』、幷『海山記』皆著錄、蓋嘗單行。清『四庫目』(一四三)謂「亦見『青瑣高議』。」……竟以迷樓爲在長安、乖謬殊甚。」然『青瑣高議』中實無有、殆紀昀等之誤也。周中孚(『鄭堂讀書記』)更推闡其評語、以爲後稱「大業九年、帝幸江都、有迷樓。」而末又云「帝幸江都、唐帝提兵號令入京、見迷樓、大驚曰、〝此皆民膏血所爲也。〟乃命焚之。經月、火不滅。」則竟以迷樓爲在長安、等諸項羽之焚阿房、乖謬殊極云。

「煬帝海山記」上下卷、出『青瑣高議』後集卷五、先據明張夢錫刻本錄、而校以董氏所刻士禮居本。明鈔原本『說郛』三十二卷中亦有節本一卷、幷取參校。篇題下原有小注、上卷云「說煬帝宮中花木」、下卷云「記煬帝後苑鳥

獸」、皆編者所加、今削。其書蓋欲侈陳煬帝奢靡之迹、如郭氏『洞冥』、蘇鶚『杜陽』之類、而力不逮。中有「望江南」調八闋、清『四庫目』云、乃李德裕所創、段安節『樂府雜錄』述其緣起甚詳、亦不得先于大業中有之。

右四篇皆爲『古今逸史』所收。後三篇亦見于『古今說海』、不題撰人。至『唐人說薈』、乃並云韓偓撰。致堯生唐末、先則顚沛危朝、後乃流離南裔、雖賦豔詩、未爲稗史。所作惟『金鑾密記』一卷、詩二卷、『香奩集』一卷而已。且于史事、亦不至荒陋如是。此蓋特里巷稍知文字者所爲、眞所謂街談巷議、然得馮猶龍掇以入『隋煬豔史』、遂彌復紛傳于世。至今世俗心目中之隋煬、殊猶是晝游西苑、夜止迷樓者也。

明鈔原本『說郛』一百卷、雖多脫誤、而「迷樓記」實佳。以其尙存俗字、如「你」之類、刻本則大率改爲「爾」或「汝」矣。世之雅人、憎惡口語、每當纂錄校刊、雖故書雅記、間亦施以改定、俾彌益雅正。宋修『唐書』、于當時恆言、亦力求簡古、往往大減神情、甚或莫明本意。然此猶撰述也。重刊舊文、輒亦不赦、即就本集所收文字而言、宋本『資治通鑑考異』所引「上清傳」中之「這獠奴」、明清刻本『太平廣記』引則俱作「老獠奴」矣。顧氏校宋本「周秦行紀」中之「屈兩箇娘子」及「不宜負他」、廣記引則作「屈二娘子」及「不宜負也」矣。無端自定爲古人決不作俗書、拚命復古、而古意乃寖失也。「稗邊小綴」の記述のうち「右四篇皆爲『古今逸史』所收。後三篇亦見于『古今說海』」の部分は思いちがいで、「右四篇皆爲『歷代小史』所收。後三篇亦見于『古今說海』及『古今逸史』」と改めなければならない。また『隋煬艷史』について孫楷第は「魯迅先生以爲馮夢龍撰、未知何據。」（『中國通俗小說書目』四三頁）と疑問を呈する。書には「齊東野人編演」とあるだけで、齊東野人が馮夢龍かどうかは不明だからである。

『史略』が『海山記』等を韓偓の撰とするのは明人が妄增したという部分、これは「稗邊小綴」のいうように『唐人說薈』に至って妄增されたと正さねばならない。

『唐宋傳奇集』收錄の三篇のテキストは「稗邊小綴」のいう諸本のうち主に明鈔『說郛』によるもので、『歷代小史』『古今逸史』『古今說海』『五朝小說』等との對校は經ていないらしい。必要とせずと認めたのであろう。

『四庫提要』卷一四三子部小說家類存目二云、海山記一卷迷樓記一卷開河記一卷江蘇巡撫採進本。三書並載明吳琯古今逸史中、不著撰人名氏。海山記述煬帝隋西苑事、所錄煬帝諸歌、其調乃唐李德裕所作、望江南調、段安節樂府雜錄述其緣起甚詳。大業中安有是體。考劉斧青瑣高議、載有此記、分上下二篇、其文較詳。蓋宋人所依託、此本刪併爲一卷、益僞中之僞矣。迷樓記亦見青瑣高議、載煬帝幸江都、唐帝入京見迷樓云云、竟以迷樓爲在長安、乖謬殊甚。開河記述麻叔謀開汴河事、詞尤鄙俚、皆近於委巷之傳奇、同出依託不足道也。

周中孚『鄭堂讀書記』卷六三小說類云、海山記一卷。迷樓記一卷。開河記一卷。說郛本。舊題唐人撰、不著名氏。四庫全書存目、宋志地理類止載開河記。焦氏經籍志止載海山迷樓二記。按海山記凡一篇、皆于隋書煬帝本紀之外、按年別記軼事、間涉怪誕、尙屬諸書所有。惟所錄煬帝湖上曲望江南八闋、乃李文饒所作之調、何得先見于大業中、此其依託之明證也。迷樓記亦一篇、皆記煬帝沈迷女色之事。後稱大業九年帝再幸江都、有迷樓、末又稱帝幸江都、唐帝提兵號令入京、見迷樓、太宗曰、此皆民膏血所爲、乃命焚之、經月火不滅。是竟以迷樓爲在長安、等諸項羽之焚阿房、何乖繆至于此極耶。開河記亦一篇、皆記麻叔謀開汴河事。所述更屬鄙俚不經、昔人所謂委巷之談是也。此三書大都宋人之不學者爲之。流俗習于所聞、遂相傳不廢耳。說海歷代小史均收入之。

14

『梅妃傳』一卷亦無撰人、以至亦明人妄增之

鉛印本『大略』はすべて『史略』に同じ。「稗邊小綴」では『唐人說薈』が唐の曹鄴撰と題したというが、これは『史略』の方がむしろ正確で、明鈔『說郛』涵芬樓本はすでになぜか「唐曹鄴撰」と題し、『五朝小說』もまた同様であ

る。魯迅が見た明鈔本には撰者名がなかったのだろうか。『顧氏文房小說』は確かに撰者の名を記さない。しかしいずれにせよ南宋以後の作品であることにちがいはなく、「稗邊小綴」が述べるように、製作年代は『史略』の記述よりもはるかに下げなければならないだろう。

『唐宋傳奇集』「稗邊小綴」全集卷十云、「梅妃傳」出『說郛』三十八、亦見于『顧氏文房小說』、取以相校、『說郛』爲長。二本皆不云何人作、『唐人說薈』取之、題曹鄴者、妄也。唐宋史志未見著錄。後有無名氏跋、言「得於萬卷朱邊度家、大中二年七月所書」。又云「惟葉少蘊與予得之」。案朱邊度好讀書、人目爲「朱萬卷」。子昂、稱「小萬卷」、由周入宋、爲衡州錄事參軍、累仕至水部郎中。景德四年卒、年八十三。『宋史』（四三九）文苑有傳。少蘊則葉夢得之字、夢得爲紹聖四年進士、高宗時終于知福州、是南北宋間人。年代遠不相及、何從同得朱邊度家書。蓋幷跋亦僞、非眞識石林者之所作也。今卽次之宋人著作中。葉少蘊の傳は『宋史』卷四四五に見える。

『梅妃傳』跋云、漢興、尊春秋、諸儒持公穀角勝負、左傳獨隱而不宣、最後迺出。蓋古書歷久始傳者極衆。今世圖畫美人把梅者、號梅妃、泛言唐明皇時人、而莫詳所自也。蓋明皇失邦、咎歸楊氏、故詞人喜傳之。梅妃特嬪御擅美、顯晦不同、理應爾也。此傳得自萬卷朱邊度家、大中二年七月所書、字亦媚好。其言時有涉俗者。惜乎史逸其說。略加脩潤而曲循舊語、懼沒其實也。惟葉少蘊與余得之、後世之傳、或在此本。又記其所從來如此。唐宋傳奇集本。

（一九九四・六・二五）